
風と砂と水が伝えたこと ～サハラのはじ家 100 年の回想録～

アーメッド・エル・ハジ・ベン・モハメッド・ハマジ著

大月美恵子訳・編集・脚注



はじ家の面々：1970 年半ば頃。後列左から、娘、長男、娘、はじ氏本人、妻メサウダ、娘。手前の小さい男の子のうち一人がおそらく次男。

第 1 章 祖父の時代：1880 年代～1900 年代

人狩り：ハマジ少年奴隷商人に捕まる

事件が起こったのは 1880 年代のいつかだとしか分からない。ハマジ (Hamadi) 少年は灌木の茂みの中で捕まった。

賊がその凶行に及んだ場所は、マリのモプチ (Mopti) の辺りだったが (訳注：トンブクトウの南、南東でブルキナファソに接する)、当時マリはまだスーダンと呼ばれていた。犠牲となったこの子供は、アルジェリア南部のアウレフ (Aoulef) へ売られた。この話は人の口から口へと伝えられたものである。当時アフリカの原住民のほとんどは文字を知らなかった。この出来事も、ハマジ少年、つまり私の祖父がその妻ファトマ (Fatma) に語り、ファトマが次女で第三子のアイーシャ (Aïcha) に伝えたものである。私はアイーシャ叔母さんからこの話を聞いた。当時歴史を伝えるには、人が人へ語るしか方法はなかった。アフリカ人はよく言ったものである。「古老が死ぬのは、図書館が一つ燃えてなくなるのに似ている」と。

事件の起きた当時、アフリカのサハラ南部で人を捕まえて北部へ売することは、黒人を標的にしている限り犯罪ではなかった。実際、世の中で奴隷制の犠牲になるのは、いつだって特定の人種、つまり黒人だったのである。賊は遠くから、灌木の茂みの中で遊ぶ子供たちに狙いをつけていた。運命は時として、子供たちを狼の群れの前に放り出すような悪戯をする。何人もの子供たちが無邪気に遊んでいたが、突然賊に囲まれた。そして、これが噂に聞く人狩りかと悟った時にはもう遅かった。その地域では、あちこちで子供を浚う賊が何組も跋扈していた。捕虜を集めた賊のキャンプは、誘拐の場所からは離れた北の方の窪地であって、周りを丘に囲まれているので容易には分からないし、出入りは丘の上から厳しく監視されていた。従って、そこから逃げ出すことはまず不可能だった。万一逃亡を図ったりしたら、子供だろうと大人だろうと、二度と同じことをする者が出ないように、見せしめに袋叩きにされた。

賊たちは多くの武器を携えていて、一部の隙も見せなかった。彼らは捕虜のどんなわずかな動きも見逃さなかった。尤も、捕虜たちは足枷を嵌められていたので身動きすらままならなかったのだが。賊たちはミツバチの巣の働き蜂のように整然と出発の準備を始めた。賊たちの一人一人が細心の注意を払って動き、みるみる準備を整えて行った。誰も一言も発しなかったが、完全に以心伝心といった風で、簡単な合図だけで用が足りるようだった。ある者はラクダを一行につなぎ、別のある者は捕虜を並べさせた。彼らの指揮系統は完璧だった。出発の命令が発せられた。北へ。全員が首領の後に従った。月のない星空の下、北極星を目印にして、一行は人目に立つのを避けて秘密の街道を進んだ。

一味には、荷を積んだ何頭ものラクダと 40 人ばかりのメンバーがいたが、うち 10 人ほどがリーダー格であるらしかった。彼らは、捕虜たちには慈悲の片鱗も示さなかった。一行はキャンプを出ると、速足でしばらく行軍した後停止した。首領は、捕虜たちを一カ所に集めさせた。

「真っ直ぐ立て。動くな。」

首領は捕虜たちに、人差し指で右へ行け、あるいは左へ行けと指図し、彼らを二つのグループに分けた。一つは弱そうな者、もう一つは頑丈そうな者のグループだった。首領は、頑丈そうな者たちの方を振り向いて言った。

「お前たちは丈夫そうだ。歩け。」

年少者や弱そうな者とはいうと、道中交代でラクダに乗っていいと言われた。賊達は弱い者たちを乗せるためにラクダを跪かせた。この小休止はすぐ終わり、一行はまたすぐに出発した。「私は運の良いグループの方に入った」と祖父のハマジは言っていたそうだ。

これが、マリのアブドゥレイエ (Abdoulaye) 地方出身のハマジ少年の身に降りかかった、不幸の物語の始まりである。こうして彼は祖国を失った。彼の子孫たちは、自分たちの祖先が誰なのかを知らない。ハマジたちを攫った賊の一行は旅を続けた。攫われた子供たちの一部は、ラクダに乗せてもらうなどいくらかの配慮を受けたが、それは賊たちが仏心を出したからでなく、子供たちが疲れ切って死んでしまうことを恐れたからだった。彼らは、売り払う前に、奴隷の数が減ったり、健康状態が悪くなって「商品」の質が低下す

るのを懸念していたのである。



イメージ画像：アウレフ地方（2002 年訳者撮影）

故郷との永遠の別れ：奴隷商人に連れられて北へ

奴隷となったハマジは、この世で最も大切な者たちと離れてしまったと思うと、胸が締めつけられるようだった。最も大切な者とは、母や父、それに兄弟や姉妹だった。この不幸な家族の家長の名はアブドゥレイエといったが、村の名士であり首長でもあった。名士の一族の中でさえ時として人狩りに捕まってしまう者がいるのだ。捕虜となった少年は、もしや村の長が自分を助けに来てはくれまいかと思ったに違いない。しかし、どうやって？ あれから何日も経ってしまっている。おそらく、もう遅い。攫った子供を連れた一行は長く過酷な旅を続けた。毎日夜明けとともに新しい道程が始まった。歩調はさして速くなかったが、行軍中は一定のペースが保たれた。時々一人一人に何かしらの食べ物と少しの水が与えられた。日没後の夕食が束の間の休息の時間だった。賊たちはラクダから荷を下ろし、薪を燃やして寝る前の食事を準備した。こうしたことが毎日繰り返された。そして何日も炎天下を進んだ頃になってようやく、捕虜の少年の心に、一体どこへ向かっているのかという疑問が浮かんだ。いったい目的地はどこなのか。3 週間の旅の果て、やっとトンブクトゥへ到着した。捕虜の子供たちは、賊たちの顔に安堵の色が浮かぶのを見た。ここまでくれば賊たちに恐れるものはなにもない。誘拐の場所からはもう十分離れていたし、この町には大きな奴隷市場があるのだから誰に憚ることもない。警察の取り締まりなどなく、市（いち）にかける奴隷をどうやって手に入れたかなどと詮議されることもない。

しかし、トンブクトゥは中継地点で、この後まだトゥアット（Touat）、ティディケルト（Tidikelt）、ティミ（Timi）、グララ（Gourara）と越えていかなければならなかった。トンブクトゥには、体力を回復するために寄ったにすぎなかった。賊たちは、捕虜たちを町に入れずに、町はずれにキャンプを張って厳しく見張った。そして本当の苦行が始まった。14 日以上給水地点のない広大な沙漠を越えるのである。タネズルフト（Tanazrouft）

沙漠（訳注：現在のアルジェリア・マリ国境辺り）、ここは他のどんな沙漠よりも乾燥度が高く、東西南北どっちへ行っても一つの水場もなければ一木一草とて生えていない。何千何万というキャラバンを踏み迷させて来た、まさに“渴き死に”の墓場である。至る所に散らばる死体も、干乾びるばかりで土に還るといことがない。この無慈悲な沙漠を越えるには、最低でも 8 日分の水を用意しなければならなかった。何十人かのキャラバンの場合は、一人が一回の休憩で飲む量から計算して、必要な量は一日に 12～14 リットルほどにもなるだろう。ラクダは冬なら 30 日間、夏なら 8 日間水なしで過ごすことができる。神は、この動物を過酷な沙漠でも生きられるよう作り変えたのに違いない。そうでなければ、地獄の猛火に焼かれるような土地で、何日も生き延びられるわけがない。

更に 1 か月間先を急いだ後、一行はついにアウレフの南東 40 キロに位置するアカブリ（Akabli）へ到着した。ここはトゥアット地方のオアシスの一つで、スーダンの外では最大の奴隷市場があり、東はインサラ、西はレガンヌ、北は遠くのエル・ゴレアまで奴隷を供給していた。労働力としての人間の売買は、動物のそれと全く同じに行われていた。市で競りにかけられる前、奴隷の子供たちは何日間か休むことを許され、元気になって顔に血色が戻るように食べ物を沢山与えられた。「品物」の価値は、年齢・体格・身長・肩の幅・胸の厚さなどに左右されるからである。見栄えの良さは「品物」の質の高さ示すので、そういう奴隷は真っ先に競り落とされた。以上は、フランス軍がアルジェリア南部のアウレフにやってくる前、19 世紀の終わりに起こった出来事である。（訳注：フランス軍による本格的なアルジェリア征服は 1830 年に海岸部から始まるが、軍がサハラ沙漠深部のオアシス都市に進軍したのは 1900 年に入ってから。アウレフ東方 30 キロのインサラの陥落は 1901 年。）



イメージ画像：アウレフ地方（2002 年記者撮影）

青年ハマジ、奴隷の身分から解放され結婚する

人間の売買は完全な犯罪である。しかし、人はどのような時、この犯罪の標的にされる

のか。きっと弱く無抵抗な者が真っ先に狙われるのだろう。

ハマジ少年はアウレフのクナナ (Kounana) 家の所有物となった。彼は、おとなしく働きた者だったので、主人は彼を可愛がり優しく扱った。主人は少年を家族のように遇してくれた。この時の良い関係のおかげで、ハマジが奴隷から解放された後も、双方に遺恨を残すようなことはなかった。一方で、今日でもまだ人種差別は生き残っており、なかなか根絶されそうにない。人間は教育によって、私たちは皆アダムとイブの子孫で神の前では平等であると少しずつ学んできたが、差別が根絶されるまでまだまだ長い時間がかかりそうである。アイーシャ叔母さんによると、ハマジと元主人の家との相互尊重の絆はずっと続いたそうだ。しかし、ことが結婚となると話は別で、その障害を取り払うのには、高度の意識の覚醒が必要である。私はいつも疑問に思っていた。どうして祖父は祖国へ帰ろうとしなかったのかと。祖父は、そうするのが怖かったのか？アウレフでは、さんざん苦勞をしたに違いないのに。不条理にもごく小さい時に奴隷として攫われたので、彼のこの世で一番愛おしかった者、つまり両親のことは忘れてしまったのだろうか？

いずれにしても、ハマジにはある日幸運が訪れた。ハマジの主人は、きちんと証人を立てて、彼を奴隷の身分から解放すると宣言したのである。ただ、この解放は全面的なものではなく、ハマジは引き続き主人と同じ屋根の下に暮し、主人の農園で働かなければならないという条件がついていた。しかし、主人にはもはや、彼を売り飛ばしたり、他の奴隷と交換したりする権利はなかった。

奴隷の身分からの解放を機に、ハマジ青年は彼自身の家族を作りたいと思うようになった。そして、ある家の長女ファトマ・ベント・アーメッド・カドゥール (Fatma bent Ahmed Kaddour) に結婚を申し込んだ。ファトマの家族は、ザウイェト・ハイヌーン (Zaouiet Hainoun) という地方の北西の小集落に住んでいた。この家族はハラティン (訳注：アラブの支配下でイスラム化した黒人奴隷の子孫) の系統であったが、後にスラマ (Slama) と名乗るようになった。婚礼は 20 世紀の初めに行われた。しかし、この同じ日、ザウイェト・ハイヌーンの領主、エル・ハジ・アーメッド・ダーハ (El-hadi Ahmed Daha) がフランス軍の隊長の命令で斬首の刑に処されるという事件が起き、祝宴は打ち沈んだ雰囲気の中で執り行われた。

解説：ハマジ少年が犠牲となった人狩りであるが、著名な博物学者にしてサハラ探検家の T・モノー博士の記述によると、これは、一部の粗暴な者たちの「犯罪」ではなく、当時遊牧民のトゥアレグ族全体にとって普遍的な「経済活動」の一つで、ラジア (razzia) と呼ばれた。遊牧民は定住民の村を繰り返し襲ったが、目的は抗争や殺戮ではなく、人やラクダの「生け捕り」にあったという。なお、植民地化後の奴隷制の廃止は、結果として、この遊牧民の「経済基盤」を破壊してしまった。(出典：Isabelle Jarry (2001), Théodore Monod, Editions Payot & Rivages : pp193-194)